月経困難症

いわゆる生理は、医学的には月経といいます。生理（＝月経）は個人差が大きく、問題なく過ごせる人がいる一方で仕事や勉強、日常生活に支障を来してしまう人もいます。月経期間中に伴って起こる病的症状は通常の月経とは区別して、月経困難症といいます。鎮痛剤を必要とする月経困難症の方は月経のある女性の約 3 割にのぼるといわれています。最も多い症状はもちろん生理痛（=月経痛）ですが、他にも、腹部膨満感（お腹が膨れた感じ）、吐き気、頭痛、疲労感、食欲不振、いらいら、下痢、抑うつなどがみられます。

月経困難症の方の中にはその原因となる婦人科疾患が見つかることがあります。このような場合を器質性月経困難症といいます。代表的な疾患に子宮内膜症が挙げられます。卵巣が腫れたり、子宮が腫れる場合もあり、強い月経痛を伴います。妊娠しにくくなることもあります。がんではありませんが、早期発見して対応すればその後の影響が少なくて済むことも多いのです。器質性月経困難症は好発年齢 30 歳以降で、月経前 4～5 日から月経後まで続く鈍い痛みのことが多いとされています。そしてもちろん、原因疾患の治療を考えなくてはなりません。生理でお困りの方は最寄りの産婦人科に受診していただき、器質性月経困難症を見分けて、その対応をご相談するだけでも今後の経過を改善する糸口にできるかもしれません。

一方で、それ以外の約 4 割余りには原因疾患はありません。これを機能性月経困難症といいます。こちらは 15～25 歳くらいの比較的若年に多く、月経の初日から 2 日目ごろの出血の多いときに症状が強いといわれています。機能性の場合は、鎮痛剤、漢方薬、低用量ピル製剤等が効果的で、症状、経過に合わせて段階的に、または組み合わせて使用していきます。中学生、高校生の場合でも、お腹にあてる超音波検査など、若年に配慮した検査によって診察を受けることができます。

【産婦人科診療部長　鏡　一成】